

キャリアコンサルティング技能検定 2 級の実技試験において、採点を担当した採点官、面接試験官にアンケートを実施した結果、以下のような意見が寄せられました。これらの内容は、個々人の課題を表すものではなく、全体の傾向としてまとめています。受検者ご自身の課題へ落とし込んでいただき、キャリアコンサルタントとしての能力向上を図る学習の参考となれば幸いです。

またこれらは試験の可否について説明するものではないことをご理解下さい。

<実技（論述）試験の傾向>

■「相談者がこの面談で相談したい『問題』は何か」について

- ・多くの受検者が、相談者が面談で相談したい問題の要点を的確に捉え、簡潔且つ網羅的に記述できていました。
- ・一方で、逐語内容をそのまま記入している解答や、相談者の状況を記入するに留まり、何を相談したいかということの理解が曖昧な解答も見受けられました。

■「キャリアコンサルタントとしてあなたが考える、相談者の『問題』は何か」について

- ・相談者の課題を具体的に記述できている答案が増えた印象です。
- ・一方で、「自己理解不足」「仕事理解不足」といった概念的な記述が依然として目立ち、具体的な問題点との関連性が不明確な場合も少なくありませんでした。またキャリアコンサルタントとしてどう捉えたかというよりも、相談者の粗探しのような解答もありました。
- ・今回のケースは、60 歳の定年後に嘱託社員として勤務しているケースでしたが、高年齢社員のキャリア支援における特有の課題への理解が不足していると感じられる解答もありました。なぜ相談者は悩んでいるのか、相談者の背景にある問題や状況を網羅的に検討する必要があります。

■目標と具体的な方策について

- ・目標設定と具体的な方策が関連付けられて、有効な目標と無理のない方策を検討できている解答も一部で見られました。
- ・一方で、問 1・問 2 との関連性が薄い目標設定もまだ多かったように思います。方策も一般的な内容が多く、相談者の課題解決に何を優先するのか、その方策が相談者にどのような効果をもたらすのかの視点が乏しいと感じられました。
- ・例えば相談者の「強み」に関連した目標である場合、強みを知ることによって何が解消されるのかということについて、根拠が曖昧な解答が少なくありませんでした。もちろん強みを知ることが大切な場合もあると思いますが、今回のケースの相談者は、「これからのセカンドライフを自分らしくどう生きるか」という人生の節目に立っています。その視点が欠けていると、ただ強みを知るために何かに取り組むという方策に終始してしまう可能性があります。
- ・さらに、コミュニケーション不足を挙げた場合においても、「関係者と相談してみる」といった具体性に欠く記述が依然として多いことは、残念に思いました。

■その他

- ・「4L」や「4S」で検討する、といった抽象的な記述も少なくありませんでした。相談者が具体的に

行動できるための支援とは、という観点で検討し、解答いただきたいと思います。

<実技（面接）試験の傾向>

■面接試験全体（ロールプレイと口頭試問）について（総評）

多くの受検者が、キャリアコンサルタントとして相談者に寄り添い、支援したいという意欲と基本的な姿勢を持っていると感じました。真に「熟練レベル」の相談を実施するには、単にスキルや知識を形式的に適用するだけでなく、相談者の非言語的なサインを捉える洞察力、問題の本質を見極める力、そして相談者の主体的な気づきと成長を促すための深い関わりが不可欠です。

今後、キャリアコンサルタントには、実務経験に基づいた理解と人間力をもって面接に臨むことが、より一層求められるでしょう。繰り返しになりますが、試験の性質上、対策に意識が向くことは理解できますが、まずは日頃の実力を発揮していただきたいと思います。

■基本的態度について

・キャリアコンサルタントにとって、適切な言葉遣いを含め、自身の考えや意図を明確かつ正確に言語化できることは基本的な能力としてとても重要なことですが、多くの受検者の方はそれを心がけていたように思います。加えて、相談者に対し、温かく誠実な態度で接することで、安心感や信頼感を築けていると感じられる受検者が多く見られました。

・一方で、以下の点が気になりました。

相談者の「今ここ」の理解不足

受検者の思いが先行し、相談者の現状理解が不十分なまま進めてしまう場面が見られました。共感的な対応は基本態度として非常に重要です。

緊張による不自然な行動

試験という状況下での緊張は理解できますが、落ち着きがなく不自然な身振り手振りは少し気になりました。面接時に、落ち着いた自然な振る舞いができるようになるためには訓練が必要かもしれません。

基本的な傾聴技法の不足

一部ですが、傾聴技法を知らずに受検されていると思われる方もいらっしゃいました。基本的なカウンセリングスキルの習得は不可欠です。

■関係構築について

・多くの受検者は、相談者に対し、受容的に接し、その言葉や感情を丁寧に受け止めていました。相談者の発言を、効果的に伝え返したり要約したりすることで、相談者に気づきを促し、良好な関係を築こうとする受検者は多かった印象です。これは、皆様が関係構築の重要性を深く理解していることの表れだと考えます。

・一方で、以下の点が気になりました。

傾聴技法の不足・誤解

傾聴技法を十分に理解していないと思われる受検者も一部いらっしゃいました。傾聴は単なる技術ではなく、相手への深い敬意と共感に基づいたコミュニケーションの姿勢であると言えますが、表面的なスキル（相槌、伝え返し）を実行しただけで関係構築ができていると誤解しているケースが見受けられました。

形式的な応答と質問攻め

定型的な応答が多く、相談者の気持ちに寄り添えていないと感じられる場面が散見されました。また、キャリアコンサルタントが相談者の話をじっくりと聞く姿勢よりも、効率的に情報を収集することに終始しているように感じられました。その結果、相談者への質問が矢継ぎ早に続き、「質問攻め」になっているかのような印象を与えてしまう場面も見受けられました。

感情への応答が形式的

感情への応答が形式的で、表面的な気持ちの確認に留まり、心からの共感が伴っていない場面が見受

けられました。具体的には、相手の言葉をそのまま繰り返す「オウム返し」が多く、感情の背景にある真意を理解しようとする姿勢や、寄り添う気持ちが不足しているように感じられる場面が散見されたことは気になりました。

■関係構築の捉え方の誤解

相談者が個人的なことを話してくれたことで関係構築ができたと思い込んだり、あるいは相談者の表情が「笑顔」であるということで関係が良好だと早計に判断されている受検者も一部で見られ、関係構築を表層的なものとして捉えている様子は気になりました。関係構築は、繊細な配慮が必要とされる、奥深いプロセスであることを再認識する必要があります。

■問題把握について

- ・相談者の訴えていることを真摯に捉えようとする受検者が増えた印象です。共有についてはまだ課題は感じられますが、相談者の問題に対し丁寧に問いかけを行い、一生懸命に関わろうとされる場面は多く見受けられました。

- ・一方で、表面的な課題解決に終始し、問題の本質を十分に理解しないままロールプレイを進めてしまう場面が多く見受けられました。相談者が直面する課題について、その背景にある状況や、それに伴う感情、価値観などを多角的な視点から捉えることに繋がっていない印象です。結果として生じる葛藤やジレンマなど、より深い部分にまで踏み込むことで本質的な問題解決に繋がるものと考えられます。

■具体的展開について

- ・多くの受検者は、目標に向かって積極的に関わろうと努力されていたように思います。問題把握で核心に近づくことができた場合、相談者の全体像を捉えることができ、多角的な視点から支援が可能となり、より持続的な成長を支援できる関係が築かれるでしょう。

- ・一方で、自身の視点のみで話を進めてしまう受検者はまだ多かったように思います。それは問題把握が影響するところになりますが、相談者が話したことのにのみに焦点を当ててしまい、その解決策を提案することで、目標設定をしてしまう場面もありました。その結果、設定された目標に対する相談者の関与が薄く、相談者に変化は起こらず面談が終了してしまう場面があり、目標設定やその後の展開が効果的に行われなかったことは気になりました。

- ・試験は時間が限られていることの焦りからか、面談の終盤に相談者を説き伏せるかのごとく、事前に用意しておいたと感じられる方策をまくし立てるように提示する場面も見受けられました。これは、見方によっては相談者との対話を軽視しているとも言え、とても残念に感じました。

以上